

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その24)】

ウリクラゲ クラゲを食らうクラゲ

京都大学瀬戸臨海実験所の北浜に稀に打ち上がるクラゲの一つがウリクラゲだ。冬季に遭遇できる。体長8 cmほどの個体が砂まみれで転がっている。白浜町の瀬戸漁港でも体長10 cmほどの大きなウリクラゲが見られるが、ここでも稀少だ。

ウリクラゲはメロンのネットの特徴がある。体中を巡る栄養輸送用の管が複雑に分岐している。画像の赤いきざきざの箇所だ。ウリクラゲは鉢クラゲほどは大きな体にはならないが、多岐に分岐した水管を体に張り巡らしているのが両者の共通の特徴である。複雑な体なのだが、体が傷んでも元の体にもどれる強い再生力がある。

ウリクラゲはまったく触手をもっていない。一生涯、触手はない。クシクラゲ類の無触手類に属する。1対の触手が生涯、あるいは生涯の一時期だけもつことがある有触手綱と異なり、ウリクラゲはしっかりした体をしている。薬品固定も容易で、その後もとても長持ちする標本として学生実習などでも見せている。瀬戸臨海実験所の歴代スタッフがもう数十年以上も前に田辺湾から採集した標本は、今でも学生達に観察されられる状態のままだ。

なんといっても、生きている時のウリクラゲは美しい。クシクラゲ類のトレードマークの櫛板を波のようにビートし、光をあびると虹色に輝き、ゆうぜんとゆったりと泳ぐ。櫛板は繊毛の束なので、こんな運動器官では速力もでない。だが、クラゲ食を発揮できるほどの機敏さを秘めている。他のクラゲたちの遊泳力もしれているが、いったん接触したら、もう決してのがさない獰猛さをもっている。すばやく体を曲げ、がま口のように口を開き、ぱくりと飲み込む。口の反対側にあるただ1個の感覚器で櫛板の運動を制御しながら、この食欲な肉食性のゼラチン質プランクトンは、獲物を求めて海を漂っているおそろしいクラゲプレデーターなのだ。画像の右端ががまぐちだ。

ウリクラゲは日本中どこでも見られ、分布は広い。ウリクラゲも雌雄同体であり、雄であり雌でもある。これはクシクラゲ類の共通の性質である。それでも自家受精で自分自身の卵と精子を結合させるのは遺伝学的によくないため一般にやらない。卵は、刺胞動物のクラゲ類と同様、ハート型卵割をして小さな幼体に成長する。受精膜があがらない性質も同じである。すなわちモザイク卵である。だから、卵割中の卵をいくつかに切り分けると、各部分から誕生する幼体は、親の一部分ずつだ。卵割の初期段階からそれぞれの部分が将来のどこの部分になるか決まっているからだ。よく知られているウニの卵のように、いくつにもわけても、それぞれの塊から一人前の幼生がうまれるのと大きな違いである。卵の時から調整がきかないのだ。



図 クラゲを食べるクラゲのウリクラゲの一種